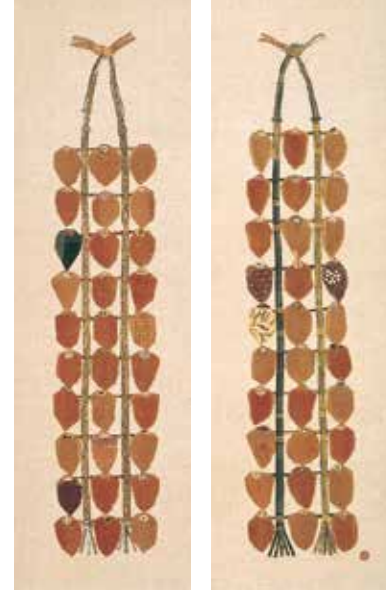




名古屋名物館
だより
2021.10.1
232



図版1 千柿図屏風 名古屋博物館蔵 昭和38年制作

点です。これらは、昭和38年から48年にかけて、京都や高山の古物商や骨董市で買い求めたり、人からもらい受けたりして集められました。そのため、色あせや繕い跡など使い古した跡が見られます。自身の作品制作のために布や着物を集めていた宮脇でしたが、これらの収集品は作品に使われた様子はなく、ほぼ完品の状態です。収集場所や時期が判明しているのは、宮脇自身が収集の情報を白布に記し、縫い付けているからです。白布の札には、「あ」の文字が手書きもしくは朱印で添えられています。この「あ」は、綾子の「あ」、アツプリケの「あ」、感動したときに出る驚きの声「あ」を表わす、宮脇作品のトレードマークです。

花祭の祭具 - けん と 鉾 -

天野 卓哉

愛知県を代表する祭礼「花祭」は湯立神楽のひとつであり、北設楽郡東栄町・豊根村・設楽町(旧津具村)の17地区(休止中の3地区含む)に伝承されています。毎年11月〜1月をかけて行われる鬼が舞う祭りとして一般に知られ、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

花祭は大きく神事と芸能から構成され、一昼夜にわたって催されます。神事によって祭場(花宿)を清め、神々を迎えて悪霊を祓い除けた後、様々な舞が奉納され、鬼の舞はそのひとつとなります。神人和合を楽しみ中、五穀豊穡・無病息災・村中繁栄などを祈願し、舞の奉納が終われば神事によって神々を返し、祭場を元に戻して花祭は終了します。

宮脇綾子 古布へのまなざし

— 宮脇綾子収集品について —

佐野 尚子

古布を用いて、身近な題材をアツプリケで表現した宮脇綾子(1905-1995)。名古屋博物館では、宮脇綾子が制作した作品12件215点、彼女が方々で収集した着物・布類53件58点を収蔵しています。これらの資料が寄贈されたのは昭和48年(1973)、博物館が開館する4年前のことでした。当時は博物館の建設工事が着工する直前であり、資料の収集活動が始まろうとする矢先のことです。宮脇綾子の作品と収集品はいち早く博物館資料となりました。同年には、名古屋城天守閣において「宮脇綾子寄贈品展―アツプリケ作品と古裂地―」が行われ、宮脇の作品・収集品は、新しく建つ博物館の宣伝活動にも貢献しました。

宮脇綾子 古布へのまなざし

— 宮脇綾子収集品について —



花祭の祭具 - けん と 鉾 -



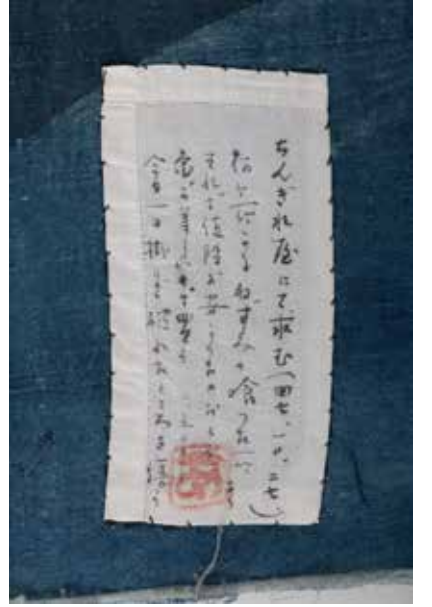
名古屋博物館だより 232号
令和3年(2021)10月1日
年2回(10月、4月)発行

編集・発行 / 名古屋博物館
〒467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL 052-853-2655
FAX 052-853-3636
http://www.museum.city.nagoya.jp

古紙を含む再生紙使用



図版2 掛布団地 昭和47年10月27日 宮脇綾子収集 名古屋博物館蔵 左上に繻い跡がみえる



図版2-2 縫い付けられた札

花祭を催すにあたっては多くの人びとの協力のもと、面や衣装ばかりでなく、数多くの祭具が必要となります。今回は祭具の一例として、博物館収蔵資料の中から「剣と鉾」をご紹介します。

剣や鉾を持つ人が神輿渡御で先導を務める様子をご覧になった方も多々と思います。剣や鉾は古くから悪霊を鎮めるための祭具として用いられてきました。花祭では、神々を勧請する神事のひとつである「天の祭り」に供えられました。昭和5年(1930)に花祭を紹介した早川孝太郎(1889-1956)はその著作『花祭』で「天の祭り」について次のように紹介しています。



図版1 剣(右)と鉾(左) 名古屋博物館蔵

「棟祭り 天の祭りは別に棟祭りともいふ。順序としては神座渡りの次で、切目の王子勧請の一方で行はれたのである。花宿の天井裏に棚を設け、神座渡りに持つて来た五色の幣、剣鉾を飾り、七十五の膳を供へ、燈明を上げ祭る。膳はそぎ板の極く粗末なもので、それに供物として酒、榎、栗、野老、芋、蕎麥餅等を盛る。一通り儀式が終わると同時に投餅をする。而して翌日祭事終了迄、二人の者が詰め燈明の世話をする、これを天の番といふ。因みに此場合の幣と剣鉾は、後に棟木に結びつけておくのである。」

現在の花祭でこの記述に近い形で行っているのは東栄町足込地区のみであり、他の地区では簡略化もしくは今で

穴の開いた部分が、一見ではわからないほど丁寧に繕われているのを見ると、布に対して真面目でひたむきな宮脇の姿勢が感じられます。

収集品は木綿や麻の素材で、筒描き、型染め、緋などの染織技法が用いられています。これらの収集品の多くに共通するのが藍染です。

宮脇は藍染の美しさに魅了され、多くの布や着物を使って作品を制作していました。著書によると、当初は斬新な模様に注目していたのが、次第に布を染めた人、織った人、着た人にも想いを寄せるようになっていったといいます。また、姑の「物を大切にしろ」という教えが、宮脇の布に対する想いに大きな影響を与えました。万延1860(1861)生まれの姑は、自身で機織りをし、夜なべ仕事に繕い物などをしていたといい、どんな布でも捨てるのを許さなかつたそうです。

そうした宮脇の心情を考えると、収集品にみられる使い込まれた色合いや繕い跡は、おそらく宮脇にとってより一層魅力的にうつったことでしょう。

宮脇は博物館への寄贈に際して、自身の収集品から選りすぐりを選んだといえます。藍染や手織り・手縫いの布や着物など、後世に残すべき先人たちの仕事を表わすものとして博物館資料にふさわしいと考えていたのかもしれない。

【参考文献】
宮脇綾子著「私の創作アツプリケ―藍に魅せられて―」大和書房 1981年

